再婚

丹羽文雄

新潮社版

再婚

昭和三十九年十二月十六日　印刷
昭和三十九年十二月二十日　発行

定価　三七〇円

著者　丹羽文雄

発行者　佐藤亮一

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話東京(260)一一一一
振替東京八〇八番

印刷・塚田印刷株式会社
製本・神田加藤製本所

© F. Niwa 1964　Printed in Japan

目次

節操……五
再婚……四一
戲畫……七一

汽笛……一二三
餞別……一四三
義母……一八一
負け犬……二一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再

婚

節

操

焼跡にならんだ低い屋並から、まっ黒な瓦斯タンクが空をつきあげていた。タンクは、裏がえしにした巨大なゴムまりの臍のようであった。怪物じみた臍からみれば、人間のいとなみは虫けらのようであろう。虫けらは、地を這うようにして、たえず動きまわっている。この町の特色は、巨大な瓦斯タンクにとどめをさす。二つならんだ瓦斯タンクの一つは、空であった。鉄骨の蔽いだけが、とおいから金網の籠のようにながめられた。金網の籠がながめる岩田屋の二階では、江木が謄写版の原紙を切っていた。今朝からはじめたが、これで二枚目である。低い屋並にふりそそぐ陽の反射で、部屋の中はあかるい。風もない、秋晴れのあたたかい日和であった。電車の警笛も、のどかにきこえる。この街ではいちばん静かないっときであった。路上にも、あまり人影がない。仕事にあぶれたものも、どこかに身をひそめてしまったらしい。よくみると、路傍の日向にうずくまっているのがある。新聞をまわしよみにしたり、いねむりしているのがいる。たまにある半日手間の求人の口を、あてにして、散りかけている連中であろう。岩田屋の階下は飲食店だが、休業中であった。それにもかかわらず、二、三の常連が表戸の幕をくぐって、店の間でとぐろをまいている。江木の耳には、さきほどから石松のどら声がきこえていた。通称石松は、江木とも親しく、大男だった。突如、笑い声がおこった。それにまじって、子供の泣き声がした。

子供の声は、よく透る。つづいて小母さんの声がきこえた。どうやら小母さんは、石松をたしなめているらしい。石松がまた、泣き虫の健坊をからかったにちがいない。ひんぱんに店の前をとおるトラックのものすごい震動音にくらべると、階下のさわぎも江木の気にはならなかった。江木は、書きつづけた。静かな部屋の中には、原紙を切る鉄筆の音だけがあった。それは秋の虫のように、快い旋律となっていた。鉄筆はひらめくばかりの速度で、小さい運動をつづけた。四ミリ罫の原紙の桝目にこだわりなく、ぎっしりと詰めて書かれていく。行間は六ミリである。二年間のブランクはあったが、江木の手際は玄人であった。蠟色の原紙は、みるみる内にレースの紐をならべたように白く切られていく。机にうつ向いた江木の顔は、紅潮している。眉根にふかい皺をよせ、歯をくいしばっている。いかにも苦しげだが、これは江木が仕事に没頭しているときの表情であった。

ときどき、鉄筆の先をたしかめる。砥石にかける。やすりをすかしてみる。新しい道具に、馴染まぬようすであった。机の上には、活版刷の本がひらかれていた。江木は、それを写していた。年代のついた、黴くさい本である。その中から数篇をえらんで、一冊につくり上げる仕事であった。原紙切り、印刷、製本に正確を第一とする江木の信条は、昔もいまも変りはない。端麗な楷書とともに、正確さで評判をとった江木である。左手の指先は、書きすすむにつれて本の上を這って移動する。江木の顔には、癖の表情以外に何も浮かんでいない。というのでは、嘘になるだろう。

——言われる儘にお絹は、手渡された遠眼鏡を目に当てて二階の窓から、人気のない砂浜を眺めた。佐兵衛が指さした芝の小舟は、信じられぬ程大きく写った。その舟の胴の間にもつれ合っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た二つの肢体が、手に触れるばかりの近さに見えた時、お絹は慌てて眼鏡から身を退こうとした。だが全身が硬直した様に動かなかった……

つづいて、真昼の太陽の下にくりひろげられる狂態が、克明に描写されていくのである。江木は、書きつづけた。渋面はいっそう深刻になり、二倍の努力が要った。江木は、はらがたった。このようなものを書き写している自分が、うとましかった。四十歳というおのれの年齢に対して、気まり悪かった。孔版技術者としての誇りがどこにあるのかと、開きなおりたくなる。が、鉄筆の動きには停滞がなかった。江木は書きつづけねばならないのである。区切りに来ると、江木は上体をおこし、鉄筆を握ったまま両腕を高くあげた。背骨が鳴った。首を二、三回大きくまわして、深呼吸をする。あぐらの足を、思い切ってのばしてみた。よみがえったようなのびのびとした快感は、自分に脚がついていたことをたしかめたようである。ふと、背後に老人が寝ていることに気がついた。ふり向こうとする自分を、江木は制した。中風で寝ている老人は、物音をたてなかった。眠っているのかも知れなかった。不自由なからだでは、眠れるあいだが極楽であろう。江木は、疲れを感じた。年齢のせいとは思いたくなかった。書くものによって、よけいな神経を使うからだ。が、疲れは、二年間この仕事から遠去かっていたせいだった。二年間は、からだ全体を使う労働をしてきた。江木は鉄筆を放して、右手を見た。親指の腹と中指の筆ダコが、大きく押しつぶされていた。力をこめるからである。赤くなったその中に、古い筆ダコがあった。皮が厚いので、古い筆ダコの部分は、別の皮のようになっていた。江木は、なつかしいものに出会ったような気がした。さかんに書いていたころは、親指のそこまめが痛くて、眠れないことがあった。そのため、剃刀でときどきそこを削った。

戦前、日本橋で、江木はすこしは名のとおった謄写版の技術者であった。戦後も疎開地で、仕事をつづけていた。神経質な江木は、仕事がきちょうめんであり、粗雑な仕事はしなかった。江木の書いたものをみて、四国や大阪から注文が来た。江木の印刷も、評判がよかった。注文が多くて、手がまわらないほどだった。雇った書き屋の腕は信用が出来ず、印刷所の名を落さないために、ほとんどひとりで書いた。江木は自分の仕事に、愛着をもった。世間には、印刷人江木良致と奥付のある本が、相当に出まわっているはずである。江木の名とともに、その筆跡も知られるようになった。自分でも孔版技術者として、ひとかどの自信をもっていた。江木良致の名を利用しようとする企画に加わったのが、江木の躓きとなった。印刷業が立ちゆかなくなった。江木は一切のものを手放し、一昨年、東京に舞いもどった。印刷関係の親しいひとも、二、三人はいたが、こちらが落ちぶれては訪ねにくかった。小さくとも店を持ちたいというみえも、捨てきれなかった。知らない印刷屋から仕事をもらってくることを考えた。が、期日と枚数に追われる一介の書き屋では、仕事が粗末にならざるをえなかった。気のすむまで手間をかけてもよいという相手は、見つかりそうになかった。自分の名を汚すような仕事なら、やらぬ方がましである。二度と鉄筆をもつまいと思った。結婚する機会を逸して、いまだに独身であることも、この決心を容易にさせた。が、融通のきかない、名人気質というものは、結局自己満足にすぎないのかも知れない。印刷をやめてしまえば、陸にあがった河童にひとしかった。このドヤ街で生活する肉体労働者となった。当然の成行だったろう。

その朝、江木は寝こみを襲われた。

「江木さん、江木さん」

自分を呼ぶ声を、江木は夢の中できいていた。からだをゆすぶられ、その感覚が眠りを追いやった。目をあけると、目の前に映画女優が羽目板のところで笑っていた。美しい顔の右のこめかみから肩先にかけて、むざんな深傷をうけていた。隙間のできた羽目板のいたずらであった。江木の前にとまっていた客が、貼りつけたポスターの切抜きらしい。毎日寝ざめにこの傷ましい笑顔をみると、江木は何となくほっとする。それは、無事に自分がこの宿に泊っていることの確証であり、一日のはじまりになった。頭が痛い。江木は、頭をふった。昨夜の深酔いの結果だった。呼んでいるのは、羽目板の美人でなく、そばにひとがいるとわかっていても、器用にその方に向けなかった。

「江木さんたら、また眠るのかい。もう十時だよ。江木さん」

再び肩をゆすぶられて、のこっていた眠気が払い落された。首をまわして、

「ああ、小母さんか、お早よう」

「お早ようもないよ。いつまで寝てるの。もう昼ですよ」

目と鼻と口もとを皺くちゃにする江木をみて、小母さんは笑った。四十三だが、小母さんの声は若々しい。身なりに気をつかわない方だが、色白で、大柄なからだには色気があった。整った顔立には、品があった。

「よいしょッ」

かけぶとんを蹴るようにして、江木は半身を起した。蹴ったふとんは、足もとで三つ折にするという芸当をみせた。男くさい匂いが、舞い上った。窓からさしこむ陽の中で、埃は銀色になって散った。酔っていたので、ズボンをはいたまま寝た。

「ゆうべは掘屋仲間のもめごとにひっぱり出されてね、何とかおさめたあとで、ひどくのまされたんだよ。小母さんの方は、もうすこし待ってくれよ。怪我して休んだ穴埋めで、まだ余裕がないんだ。すまないが……」

窓に向けた目が、まぶしかった。となりの屋根の上に、青い空があった。窓際に張られた荒縄が、風でわずかにゆれている。乱れた髪をかきあげ、江木はてれくさい顔を小母さんに向けた。飲み代が、五百円ほどたまっていた。ほかの店でのみまわっていると思われたくなかった。江木が足の怪我で医者に通っていることは、小母さんも知っている。

「飲み代を催促にきたんじゃないんだよ」と、小母さんはまじめな顔になった。つとめて真剣な顔をしようと努めるらしい。「江木さん、今でも印刷できるかい?」

「印刷? うむ、やれば出来るさ」

江木は飲むと話好きになり、印刷屋の思い出話を小母さんにしたことがある。

「じゃ、印刷をやってくれるね?」

「どこか、印刷屋の口でも見つかったというのか。おれは二度とやるまいと思ってたんだが」

気のない江木の調子に、小母さんはあわてた。

「私が、本をつくってもらいたいのだよ」

「小母さんが?」と、江木が笑い出した。「何でまた本なんか……」

「それは、ね」

小母さんはことばを切って、うしろの通路と両側の窓に目をくばった。秘密めいたふるまいであった。誘われて江木は、ひろい部屋の中を見まわした。二十人もの大部屋は、だれもいず、が

らんとしていた。この第二扇屋は、水洗便所で、畳も新しく、棚も全体につけてあるという帳場のふれこみであった。が、大部屋は客室というよりは、土方の飯場に近かった。新しい畳は、縁なしであり、粗悪品である。羽目板には万年床が、枕をならべてならんでいた。棚といっても、窓枠の高さに、八寸幅の板が、部屋の内側を一巡していた。そこには、ぬすまれようのないボロや、古雑誌がのっていた。炊事と洗面の汚水もためてながす簡易水洗便所は、野菜屑やゴミがつまって、故障しやすい。竹棹でつついたり、床板をはがす騒ぎは、毎度のことだった。土間には、満足な履物は一足もなく、破れたゴム長や地下足袋の類が、床下からはみ出していた。

「本というのは、実はこんな本なんだよ」

小母さんがふところから、冊子をとり出した。半紙の袋綴じで、ザラ紙で、本ともいいかねるものだった。江木は、何気なくめくってみた。それが、ひそかに売られている禁止本であることはすぐわかった。色情的な文章が、へたな謄写版刷りにされていた。いかがわしい絵も、稚拙をきわめていた。自分の謄写版刷が侮辱されたように江木は感じた。

「小母さんともあろうひとが、何だい、こんなものを……？」

冊子をほうり出した。組しやすしとみられたことが、はらだたしかった。小母さんは、ことばにつまった。

「こんな本を、小母さんがつくるのかい。第一小母さんは、これをよんでいるのかね」

気をとり直したように江木は、おだやかに訊いた。小母さんは、ほっとした。

「私は、よんだよ。そして、こういうものを作って売りたいと思ったよ」

小母さんは、思いつめていた。

「とにかく、その本をしまってから、話をしよう。いや、話をきこうじゃないか」
だれもいない部屋の中で、男と女がいかがわしい本を中にして話し合っている。そばには、万年床だが、ふとんもある。若い男女でなくとも、あやまちを犯すに足る条件がそろっている。むしろ四十男と四十女の方が、あやまちは犯しやすいかも知れなかった。第二扇屋の便所は、奥の方にあった。だれかが土間を通らないともかぎらない。小母さんだって、まだ老いこんだ年齢ではない。十分に色気があると、江木が気がついたからである。小母さんはてれくさそうに、冊子をふところにしまった。
「恥をいうようだけど、一家八人が千乾になるんだよ、このままでは……江木さん」
肩を落した小母さんは、急に老けたようだった。おっとりとした小母さんを見なれている江木は、意外だった。岩田屋は、第二扇屋から五軒とはなれていない飲食店である。間口二間、奥行三間、しかも二階建であった。電車通りと交差する大通りに面した路地の角にあった。大勢の客のあつまる店を好まない江木は、この街に来たころから、ひいきにしていた。丸椅子を五つおいた、せまい店であった。鉤の手になった飲み台、その内側は土間で、柄の大きな、色の白い、おっとりとした小母さんがいた。何となく育ちのよさがわかるような人柄であった。土間には、硝子戸棚がおいてあった。中には皿やコップだけで、酒のさかながはいっていることは稀であった。その奥に、こわれた冷蔵庫が戸棚代りに使われていた。つきあたりが裏口の硝子戸で、その右に手洗場があった。左側には、階段の裏側が店の上までのびていた。客はきまった顔ぶれだった。その半分は、朝鮮のひとたちだった。岩田屋にはいつも、かれらの仲間が何人かたむろしていた。終戦後急に強くなったかれらのふるまいに懲りている日本人は、岩田屋を素通りした。朝鮮のひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com